

静岡黎明期の英語教育と渋江保

山本 勉

一 はじめに

渋江保と明治期静岡の英語教育について論じたい。渋江は1885年（明治18年）12月～1890年（明治23年）3月の期間、現静岡県浜松市天竜区春野町と静岡市に在住している。この4年有余の渋江の活動にはこれまでの渋江研究ではあまり触れられてこなかった重要な評価にかかわる事項がある。一つには英語学者・英語教育者としての渋江である。もう一つは自由民権運動の啓蒙家としての渋江である。渋江は欧米の書物を翻訳する中で自由民権思想を身に付け静岡県民に英語教育を施しながら暁鐘新報の主筆として活躍した。

小論においては、渋江の静岡県内での足取りを追いながら、黎明期静岡の英語教育に果たした渋江の役割とその成果（弟子への影響）を考察する。

渋江保年表（表1）

区分	時代	滞在期間	滞在地
1期	幼少時代	1857年7月～1868年4月	江戸
2期	弘前時代	1868年4月～1871年3月	青森県弘前市
3期	第一次修学時代	1871年3月～1875年1月	東京
4期	浜松時代	1875年2月～1879年10月	静岡県浜松市
5期	第二次修学時代	1879年10月～1881年7月	東京
6期	宝飯中学校長時代	1881年8月～1882年12月	愛知県豊川市
7期	東京横浜毎日新聞時代	1883年1月～1885年12月	東京
8期	静岡時代	1885年12月～1890年3月	静岡県浜松市天竜区春野町 静岡市
9期	博文館時代	1890年 3月～1901年	東京
10期	大学館時代～晩年	1903年～1930年4月	東京

二 英学研究所と渋江保

静岡大務新聞の記事『英学研究所』（明治18年5月15日付）に次のような記載が見られる。「遠州周智郡領家村の栗田輝永氏の邸内へ先頃より英学研究所なるものを設け東京より竹谷熊吉を教師に聘し昨今頻りに英学を研究さるるに据り入学者もまた数十名の多きに及ぶといふ。」(1)静岡大務新聞の記事『英学研究所』には、渋江保の名前の記載はないが、『嶽陽名士傳全』の「栗田輝永君之傳」に静岡大務新聞の記事に見られた竹谷熊吉に並んで渋江の名前が見られる。

「栗田輝永君之傳」には次のように渋江のことが記載されている。「全十六年に犬居銀行を設立し十八年に竹谷渋江の二氏を聘して英学研究所を設置す君の公共の事業に推薦せられたるものを列举すれば」(2)と栗田輝永の功績の中に渋江の名前が見られる。竹谷とあるのは、竹谷熊吉、また渋江とあるのは渋江保に相違ない。

『嶽陽名士傳全』にある渋江が渋江保であることを裏付ける資料がある。この資料は、『犬居小学校文書（若身）』の中の『領家尋常小学校沿革史八』に閉じ込められていた『栗田輝永君小傳』である。この小傳は、1890年（明治23年）6月13日に出版されている。執筆者として森下喜作(3)の名がある。『領家尋常小学校沿革史八』には、第九附記として次のように筆書きで題名が書かれている。「第九附記 一学校の為に功劳あるものの事績 周智郡犬居村領家七十八番地平民栗田輝永」(4)この附記は二頁に渡って書かれており、その後に、『栗田輝永君小傳』が閉じ込められている。『栗田輝永君小傳』には「出版」とあるので小冊子として出版したのだろうか。この点について郷土史家、木下恒雄氏に尋ねたところ、『栗田輝永君小傳』の複製があった。この複製を木下恒雄氏よりご厚意で譲り受けることが出来た。しかし、『領家尋常小学校沿革史八』に閉じ込

められていた『栗田輝永君小傳』は筆書きの直筆であり、譲り受けた小冊子は活字で組まれた印刷物である。文面の内容は同一であるが、直筆のものには、最後の行に「明治廿七年静岡県々会議員トナル。行年六十五歳ナリ。静岡県平民犬居同志会々長森下喜作氏に据る。」(5)とある。

この二つの『栗田輝永君小傳』には竹谷熊吉と渋江保の両氏の名前が次のように記されている。「明治十二年ニ於テ七百余円ヲ投シ領家学校ヲ新築シ十四年其経費中へ百円ヲ寄附シ再ビ十八年ニ至テ三百三十円ヲ寄附シ全年竹谷熊吉渋江保ノ両氏を聘シテ自村へ英学研究所ヲ設置セリ」(6)木下恒雄氏によれば、山田萬作が『嶽陽名士傳全』を編集するにあたり、森下喜作に『栗田輝永君小傳』の執筆を依頼したのが始まりであるとのことだ。先ず『栗田輝永君小傳』を森下喜作が執筆し、それを参考に山田萬作が『嶽陽名士傳全』に『栗田輝永君小傳』を載せ、一方静岡県士族間宮武が『栗田輝永君小傳』を小冊子として活字を組み印刷出版したと考えるのが自然ではないと思われる。栗田輝永(1850～1904)は地域の名望家であり、犬居銀行の設立を始め、街道の整備や領家小学校の建設等数多くの事業を手がける傍ら、静岡県議会議員も務め郷土発展のために尽力した人物である。

森鷗外が『渋江抽斎』を執筆するにあたり参考とした『抽斎歿後』の他に、渋江は山路愛山の『独立評論』に犬居を訪れたことを次のように記している。「東京新聞の話は之れ位に止めて置いて序でに少しばかり地方新聞の古い頃の話をしませう。私は明治十八年頃精神過労のため毎日新聞を止め、遠州の乾へ引込んで暫らく其処で静養して居たが、其後東京へ帰りがけに静岡へ立寄った処を旧知の前田五門といふ人に取捉へられ、否応なしに同市に引き止められて、静岡英学校、文武館及び高等英華学校の三校に教鞭を取るようになった。」(7)ここに記載の

ある「乾」が「犬居」であることは言うまでもない。

渋江と竹谷が教師となって村民に英語を教えた英学研究所ではどのような英語教育が施されていたのか、村民たちは渋江や竹谷から英語を通して何を学んだのか、渋江が犬居を去った後、英学研究所はどのようなになったのか、その詳細は今のところわかっていない。

渋江は一年にも満たない期間を犬居で過ごし、その後静岡に移り住むことになる。

三 三つの私立学校と渋江塾成立の経緯とその教育内容

渋江が静岡に転籍した時のことが『渋江抽斎』のその百九に次のようにある。「抽斎歿後の第二十八年は明治十九年である。保は静岡安西一丁目南裏町十五番地に移り住んだ。私立静岡英学校の教頭になったからである。校主は藤波甚助という人で、雇外国人にはカッシデエ夫妻、カッキング夫人等がいた。当時の生徒で、今名を知られているものは山路愛山さんである。通称は弥吉、浅草堀田原、後には鳥越に住んだ幕府の天文方山路氏の裔で、元治元年に生れた。この年二十三歳であった。」

(8) 静岡英語専門学校主の藤波甚助（1850～1917）は静岡英語専門学校を創設し生涯を賭して静岡の英語教育に尽くした人で「静岡市史」の編集にも尽力した人物である。『渋江抽斎』のその百九に「（渋江は：引用者）私立静岡英学校の教頭になったからである」（9）とあるが、渋江は、静岡英学校の他に高等英華学校・静岡文武館・渋江塾でも教鞭を執っている。渋江が携わった3つの私立学校と渋江塾ではどのような教育が行われていたのか、これらの学校で渋江はどのような教育を静岡市民に施したのか、英語教育者としての渋江について見ていきたい。

（1）英語教育者としての渋江保

『渋江抽斎』のその百九に静岡において英語教育に携わった

渋江の様子が次のように描かれている。「拙斎歿後の第二十九年は明治二十年である。保は一月二十七日に静岡で発行している『東海暁鐘新報』の主筆になった。英学校の職はもとのごとくである。『暁鐘新報』は自由党の機関で、前島豊太郎という人を社主としていた。五年前に禁獄三年、罰金九百円に処せられて、世の耳目を驚かした人で、天保六年の生まれであるから、五十四歳になっていた。ついで保は七月一日に静岡高等英華学校に聘せられ、九月十五日にまた静岡文武館の嘱託を受けて、英語を生徒に授けた。拙斎歿後の第三十年は明治二十一年である。一月に『東海暁鐘新報』は改題して東海の二字を除いた。同じ月に中江兆民が静岡を過ぎて保を訪うた。兆民は前年の暮に保安条例によって東京を逐われ、大阪東雲新聞社の聘に応じて西下する途次、静岡には来たのである。六月三十日に保の長男三吉が生まれた。八月十日に私立渋江塾を鷹匠町二丁目に設けることを認可せられた。」(10)渋江が関わっていた三つの私立学校と渋江塾について『静岡県史資料編十七近現代二』の「第4篇教育・文化第1章学校教育の確立」の県立諸学校・私立諸学校一覧表に見られる静岡文武館・高等英華学校・静岡英語専門学校・渋江塾の資料を表2にまとめた。(11)

渋江保が英語を指導した学校の一覧表(表2) 1890年12月31日『静岡県統計書』							
校名	所在地	学科	開校年月	教授者数	生徒数	卒業生徒数	中途退学生徒数
静岡英語専門学校	静岡市本通三丁目	英学・数学	1883年7月	4人	29人	記載なし	7人
静岡文武館	静岡市三番町	英学・漢学・中学予備	1885年12月	6人	60人	5人	21人
高等英華学校	静岡市西草深町	英学・漢学・中学予備	1886年7月	4人	57人	9人	記載なし
渋江塾	静岡市安西一丁目南裏町	英学・漢学・数学	1888年8月	3人	89人	記載なし	60人

前島豊太郎（1835～1900）は明治期の自由民権運動家で1881年（明治14年）「東海暁鐘新報」を創刊し自由民権思想の普及を図った人物である。暁鐘新報の主筆となった渋江は少なからず社主前島豊太郎から民権思想の影響を受けたであろう。中江兆民（1847～1901）は「東洋自由新聞」を創刊し、主筆として明治政府を攻撃し、自由民権運動の論陣を張り東洋のルソーと呼ばれた。1887年（明治20年）には安条例で東京を追われ大阪で東雲新聞を創刊し、反政府を掲げ自由民権運動の啓蒙を行った。この時期に静岡にいた渋江は中江兆民と会っているが、このことが山路愛山『独立評論』再興第八号の澁江保氏談話「中江兆民居士」に次のようにある。「私は其後静岡の暁鐘新聞主筆に聘せられて同地に趣き、居士は東京に居て、当時後藤伯等のこしらへて居た政談といふ雑誌に筆を執って居たが、絶えず手紙の交換はして居った。居士がルソーの民約論の訳者で、所謂自由民権運動の激励者であったことは今更申す迄もない。随って当時の藩閥政府よりは、居士の如き、最も眼の上の瘤とされて居たもので、明治二十年保安条例発布の際には他の幾多志士と共に皇城三里以外の地に退去を命ぜられた。居士は外に行く可き処もないので、大阪の東雲新聞といふに身を寄せることになり、其の下阪の途次静岡に居た私の処へ立寄った。それは翌二十一年の一月二日であつた。」(12)渋江は、当時、自由民権運動の指導者であつた中江兆民や前島豊太郎の影響を受けて暁鐘新報主筆として腕を振るつた時期である。渋江は澁江保氏談話「中江兆民居士」の中で、「当時私のやって居た暁鐘新聞は改良後の第一号を出したときであつたが、滅多に人を褒めたことのない居士は、何を感じたものか其の新聞を見て、私の書いた論説を非常に褒めて。『これから兄弟分にならう』と言つた。」(13)と中江兆民のことを述懐している。

それぞれの学校と渋江の関わりについて『静岡県教育史通史

篇上巻』「第4章 学制頒布と学校設立 (3) 私立学校の簇生 英語塾と渋江保」に次のように述べられている。「県内の中学校が静岡尋常中学校に統合された明治一九年、渋江抽斎の七男渋江保が静岡に移ってきた。彼は明治八年、東京師範学校を卒業したのち、浜松県に派遣され、瞬養学校の設立や教則の作製にあったことは既に述べた。その後慶應義塾に入学するため、一旦上京したが、一九年、藤波甚助を校主とする私立静岡英学校の教頭として招かれ、翌二〇年一月には静岡で発行している自由党の機関誌「東海暁鐘新聞」の主筆をもかねることになった。静岡英学校は、明治一七年七月、藤波甚助によって静岡屋形町に設立されたもので、その前年すでに開かれていた英語塾を発展させたものである。静岡英学校では一七、一八年には英学だけを教授したが、一九年から二四年までの間、英学・漢学のほか数学を含めて三学科を教えるようになった。渋江は師範学校在学当時、「数学を除くほか、一切の科目を温習せずに、ただ英文のみを読んだ」、と数学と英語につよい関心をよせていたので、同校に着任してこの学科を担当したものとおもわれる。渋江は、二〇年七月一日には、佐倉信武が一九年八月に静岡宝台院境内に設立した静岡英華学校に招かれ、さらに九月一五日には英学・漢学・和学・剣法を学科とする静岡文武館の嘱託となって、英語を教授している。これらの私立学校がすべて英学を教科として教授していることは、英学・数学に堪能であった渋江保の関係していたためばかりではなく『静岡県統計書』にあげられている私立学校の学科目をみると、明治一六年以降設立された私立学校の大部分が英学や数学を教授している。(中略) 静岡市内の私立学校で教鞭をとっていた渋江保は、二一年八月、兄の脩とともに、自ら渋江塾を静岡安西一丁目に開き、英学・漢学・数学を教授した。翌二三年には、東京博文館の仕事をすすめるために、再び上京したが、上京にあたって渋江塾を閉じ、

英学校や英華学校・文武館の教職を辞した。渋江の在静期間は長くはなかったが、英学校在職当時の影響は大きく、後年山路愛山が文明批評に文筆を揮ったのも渋江の英学に啓発されるところが少なくなかったことと思われる。明治後期から大正にかけて山路愛山の主宰した『独立評論』に渋江が積極的に協力したのも、この在静当時の邂逅と薫陶によるものと思われる。また、明治一九年から二〇年にかけて文武館に通学していた上田敏もまた、渋江が同館で教鞭をとった時に、師弟関係があった。」(14)

山路愛山(1865～1917)は歴史家・ジャーナリスト、上田敏(1874～1916)は英文学者・詩人であり二人とも渋江の教えを受けている。この他に渋江の教え子として中国人留学生教育に生涯を捧げた静岡県掛川市出身の松本亀次郎(1866～1945)がいる。

(2) 三つの私立学校と渋江塾成立の経緯と教育内容

1) 静岡英語専門学校

① 静岡英語専門学校について

『静岡県英学史』に静岡英語専門学校について次のようにある。「静岡市に於ける最初の正則英語学校と称し得るものは静岡英語専門学校であった。明治17年(1884)7月、藤波甚助によって、屋形町に創立され、はじめは校名を静岡英学校と称し、後年静岡英語専門学校と改めた。昭和3年11月、静岡市が甚助を追彰した時の表彰状に「夙に英語教育ノ必要ニ着眼シテ明治16年私立英語学校ヲ開設シ明治32年閉校スルニ至リタルモ」とあって、開校を16年としたのは、その年から友人村松一と共に、追手町の旧御用邸裏あたりで英語塾を開いていたのを指したものであろう。17年7月の英語学校はこの英語塾の発展したものと考え得るからである。講師には市内の中学校、師範学校の英語教員等を招いた。その中にはキャディシー夫妻、カッキン夫人等がいた。授業は午後に行った。屋形町の校舎は火災のため類

焼したので、20年7月本町3丁目に移り、21年に同所に校舎を新築したが、翌22年2月の火災に再度類焼、改めて二階建て洋館の校舎を新築して、校名を静岡英語専門学校と改めた。教員中には東洋英和学校出身の加藤秋真、渋江抽斎の嗣子渋江保がいた。

（中略）（渋江は：引用者）20年、英学校に勤務のまま、東海暁鐘新聞（社主前嶋豊太郎）の主筆になった。保が静岡英学校で教えた生徒の中には、当時23歳の山路弥吉（愛山）がいた。保は同年7月、兼ねて佐倉信武の静岡高等英華学校に聘せられ、9月には松下之基の文武館の嘱託を受けて英語を教授した。19年静岡中学校に入学して翌年東京に移るまでの間に、上田敏が文武館に通っていたことがあるので、この間に保の教えを受けたことがあったのではあるまいか。21年（1888）7月、保の兄脩が東京から来て、静岡警察署内巡查講習所の英語教師になったので、保は兄と共に鷹匠町一丁目に英語塾渋江塾を設けた。」（15）同書に「静岡市に於ける最初の正則英語学校と称し得るものは静岡英語専門学校であった。」とあるが、静岡の明治英学の始まりとも言える「静岡学問所」の流れを汲んだ正則英語教育が静岡英語専門学校にも引き継がれたのではないかと思われる。なぜなら「静岡学問所」の前身である「府中学問所」において、明治元年、イギリスから帰国した外山正一（1848～1900）が英学主任として教鞭を執っていたからである。外山は明治の社会学者・教育者で東京大学文学部長や総長を歴任した人物で、1889年（明治22年）に『正則文部省英語読本』全五巻を編纂し正則英語教育を推進した。

② 静岡英語専門学校における教育内容

『静岡県史資料編十七近現代二』の「第4編教育文化第一章学校教育体制の確立第二節私立学校・中等教育 二十七私立静岡英学校の目的・学科・学級および課程・教科書」の設置の目的・学期及課程・教科書に次のようにある。「一、設置ノ目的

英語学ヲ主トシ、傍ラ数学漢学ヲ教ヘ、高等中学校并ニ官立学校ヘ入ラント欲スル者等ヲ教授スル所トス。本校ハ男女ヲ論セス之ヲ教授スル所トス。但、男生徒ハ和洋男教師之ヲ教ヘ、女生徒ハ和洋女教師之ヲ教フ。一学科 英学科 但英文科 歴史科 物理科 生理科 化学科 経済科 政治科 法律科 論理科 哲学科ノ十科ニ分ツ。数学科 但 算術科 代數科 幾何学科 三角術科ノ四科ニ分ツ 漢学科 一、学期及課程 修業年間ハ初等科三年、高等科一年、合シテ四年トス。但、初等科ノミヲ修メテ退学スルモ妨ゲナシ。学年ハ九月一日ニ始リ翌年七月三十一日ニ終ル。而シテ一学年ヲ前後ノ二期ニ分ケ、前期ハ九月一日ヨリ翌年二月廿八日迄、後期ハ三月十一日ヨリ七月三十一日迄トス。学科課程ハ別表甲号之通。一、教科書別表乙号之通。」(16)

2) 静岡高等英華学校

① 静岡高等英華学校について

『静岡県英学史』に静岡英華学校について次のようにある。
「渋江保が明治20年7月に英語教授を囑託された、静岡高等英華学校は、佐倉信武が長谷川善太郎等と協力して、明治19年8月に宝台院境内に設立した英学校である。教授に当たった者で判明しているのは前記佐倉、長谷川、渋江の他、静岡教会の平岩愼保である。愼保は英語会話を担当していたという。この学校が何年頃まで存続したものか、何等記録したものなく未詳である。佐倉は明治20年(1887)10月には静岡県尋常中学校書記兼教諭試補舎監となり、11月には私立静岡女学校校主にも挙げられているので英華学校の校務には専念できなかったであろうし、「嶽陽名士伝」の長谷川の項には、高等英華学校で「学生を教養すること数年」とあり、一方渋江保が静岡を去った23年(1890)の初めに退職願いを出しているので、本校の教育が行われたのは短く3、4年、長くて5、6年位の間と考えられる。」(17)

② 静岡高等英華学校の教育内容

『静岡県史資料編十七近現代二』の「第4編教育文化第一章学校教育体制の確立第二節私立学校・中等教育 二十六私立高等英華学校教則・教授法の概略・講師斉藤和太郎・坂井牧之助履歴」の教則に静岡高等英華学校の教育について次のようにある。「一、教則 本校ハ高等普通学科ヲ教授ス。 一、教授法ノ概略 訳読ハ読本、歴史等ノ原書ヲ日本語ニテ分解訳読セシム。講義ハ講師自ラ政治、経済、法律、哲理等ノ原書ヲ講明ス。読方ハ語音を正シテ英文ノ読方ヲ習ハシム。和漢学ハ講師和漢ノ史書経書等ヲ講釈ス。数学ハ加減乗除ヨリ三角術マテ勤メテ原書ニ拠リ教授ス。英語会話ハ講師生徒ト混シテ臨場対話ヲ為ス者トス。作文ハ記事論説ヲ習ハシメ兼テ英文和解を脩メシム。輪講ハ生徒ヲシテ各級ニ適当セル原書ヲ輪読セシム。」(18)続いて講師斉藤和太郎と坂井牧之助の履歴が記載されている。教授法にある「英語会話ハ講師生徒ト混シテ臨場対話ヲ為ス者トス。作文ハ記事論説ヲ習ハシメ兼テ英文和解を脩メシム。輪講ハ生徒ヲシテ各級ニ適当セル原書ヲ輪読セシム。」から、静岡における英学はどちらかと言えば正則であるが、静岡高等英華学校の教育内容から正則と変則の両面の英語教育が静岡においても行われていたことがわかる。これは変則英語教育を推進していた慶應義塾で渋江が英語を学んだことと関係があると思われる。

3) 静岡文武館

『静岡県英学史』に静岡文武館について次のようにある。「(藤波：引用者)甚助は明治14年(1881)32歳の頃から英学の必要を痛感して、専心その修得に勉めた。彼が教えを受けたのは静岡安西1丁目南裏町21番地、文武館の館主松下之基であった。安西1丁目南裏町は現在の八千代町であり、文武館はもと瓦屋小路にあった丁字湯の向かい右角にあって、二階建てであった

という。文武館及び松下之基については詳細未詳である。松下之基は静岡市役所の古い戸籍簿の記載によると、士族、前戸主松下良左衛門の長男で、安政6年（1859）8月14日生まれであり、明治29年3月23日附けで、神奈川県津久井郡牧野村2607番地へ転籍したことになる。この牧野村は昭和31年7月20日合併によって藤野町となっている。藤野町の旧戸籍簿には松下之基の記載がないため、之基の子孫を確認することが出来ない。ただ同地区の篠原小学校の沿革誌中の歴代訓導中に之基の名が連ねてあるが、それも氏名だけで在職の年代も不明である。文武館は何年頃に始められたものか不明だが、甚助が英学に志した直後にここに学んだとすれば明治14、15年頃には既にあったものと考えられる。又、前に述べた如く、渋江保がここで英語教授を囑託されたのが明治20年9月であり、静岡中学校生徒であった上田敏がその前年あたりから、ここに学んでいたことから、20年頃にもあったことは確実である。おそらく、29年に之基が神奈川へ転出したので閉館したものであろう。」（19）

4）渋江塾

① 渋江塾とその教育内容

渋江塾については『渋江抽斎』のその百九に「八月十日に私立渋江塾を鷹匠町二丁目に設くることを認可せられた。」（20）とあるが、『静岡県史資料編十七近現代二』の「第4編教育文化第一章学校教育体制の確立第二節私立学校・中等教育 三十二 渋江塾設置の目的・学科・渋江脩履歴書」に次のように渋江塾の教育内容が詳しく示されている。「一、設置ノ目的 英語学、英学ヲ主トシ、傍ラ数学、漢学ヲ教ヘ、男女ヲ論セス入学ヲ許シ、他日高等中学其他高尚ナル学科ヲ教授スル官公私立男女学校ニ入ルノ予備トス。但、男生徒ハ男教師之ヲ教ヘ、女生徒ハ女教師之ヲ教フ（女生徒ヲ募リ女教師ヲ置クノ一事ハ当分欠ク）。 一、学科 英学 英文学、法律、政治、理財、哲学、

科学ノ六種トス。 数学 算術、代数、幾何、三角術ノ四種トス。但、此項中ニ簿記学ノ一科ヲ設ク。漢学ノ三科トス。」(21)これらの科目を見ると英文学の他に法律・政治・哲学・算術・代数等の科目が配置されている。科目「英文学」についてはその詳細はわからないが、渋江が1891年（明治24年）に『英国文学史全』を博文館より出版していることから、静岡在住当時から英文学について精通していたことが伺える。因みに『英国文学史全』の目次には「第一篇英国文学ノ起源」や「第二篇英国文学ノ発達」等(22)の記載がある。

② 渋江塾指導者 渋江 脩について

『静岡県史資料編十七近現代二』の「第4編教育文化第一章学校教育体制の確立第二節私立学校・中等教育 三十二 渋江塾設置の目的・学科・渋江脩履歴書」には、渋江塾に携わった渋江保の実兄である渋江脩の履歴書が以下のように記されている。

「静岡県駿河国有渡郡 静岡鷹匠町二丁目二十八番地寄留
東京府神田区佐久間町二丁目十二番地 平民 渋江脩 二十九年六月

- 一、明治二年一月ヨリ同五年マテ、東京神田岩本町海保弁之助ニ就キ漢学修業。
- 一、明治二年三月ヨリ同三年十二月マテ、弘前藩山澄直清ニ就キ算術修業。
- 一、明治四年一月ヨリ同八月迄、大学南校ニ於テ英語学修業。
- 一、明治四年五月ヨリ同五年十月マテ、東京本所松坂町共立学舎ニ於テ英語学修業。
- 一、明治五年一月ヨリ同六年十一月迄、東京下谷西鳥越町文明義塾ニ於テ米人フレデリック ミルモット ガズナニ就キ英語学修業。
- 一、明治七年一月ヨリ同八年九月迄、東京本所錦町遷喬義塾ニ於テ英学修業。

- 一、明治九年二月ヨリ同十年四月迄、東京芝公園地内英人キーリングニ就キ英語学修業。
- 一、明治十年五月ヨリ同十一年二月迄、東京魁新聞社編輯人タリ。
- 一、明治十三年四月ヨリ同九月迄、電信修技学校教師英人グリゴリーニ就キ英語学修業。
- 一、明治十四年五月ヨリ同九月迄、神戸電信分局雇英町京橋学校ニ於テ英人サムマーニ就キ英語学修業。
- 一、明治十九年三月ヨリ同十月マテ、東京独立新聞主筆米人イーストレーキニ就キ英語学修業。
- 一、明治二十年十二月ヨリ静岡県警察本部嘱託英学教師タリ。
- 一、明治二十年十二月ヨリ静岡私立文武館英学教員タリ。」(23)

この渋江脩の履歴より、脩は明治期に日本にやって来た御雇外国人から英学を学んでいだことがわかる。また、静岡においては渋江塾の他に静岡県警察本部の嘱託や文武館の教師として英語を教えていたことが伺える。

渋江保の履歴は、『静岡県史資料編十七近現代二』に記載はないが、渋江脩の履歴に倣い、山崎一穎『鷗外ゆかりの人々』の「七渋江保」の渋江保略年譜・森鷗外『渋江抽斎』・『独立評論』の「渋江保氏談話 明治初年の学風」及び『抽斎歿後』を参考に学問修養並びに教育者としての渋江の履歴をまとめると以下のようなになる。

- 一、1860年（万延元年）10月、海保漁村の漢学塾に入り、漁村・竹逕から漢学を学ぶ。小島成斎に書法を学ぶ。
- 一、1863年（文久3年）漢医方を多紀安琢に学ぶ。
- 一、1868年（明治元年）弘前にて藩儒兼松石居に漢籍を学ぶ。
- 一、1871年（明治4年）上京し、4月海保竹逕の門に学ぶ。5月、尺振八の共立学舎で英語を学ぶ。6月大

学南校に籍をおき、放課後フルベックに英語を学ぶ。

- 一、1872年（明治5年）東京師範学校にてアメリカ人、スコット及びブラウンから発音・書き取り・会話等を学ぶ。六月、竹逕死去の後、同門の高弟島田篁村に学ぶ（明治31年8月まで）、根本羽嶽（通明）に漢籍を学ぶ。（明治39年10月まで）。
- 一、1875年（明治8年）浜松県瞬養学校教頭として赴任。
- 一、1879年（明治12年）慶應義塾に入学して、キーリング・ラムバードに英学を学ぶ。
- 一、1881年（明治14年）愛知県宝飯中学校長として赴任。
- 一、1885年（明治18年）英学研究所にて竹谷熊吉と英語の指導をする。
- 一、1886年（明治19年）静岡英語専門学校教頭として英語の指導をする。
- 一、1887年（明治20年）静岡高等英華学校にて英語の指導をする。
- 一、1887年（明治20年）静岡文武館にて英語の指導をする。
- 一、1888年（明治21年）渋江の兄、渋江脩と静岡市鷹匠町一丁目に英語塾を開校する。

四 英語教育者、渋江保とその弟子

（1）山路愛山

山路愛山（1865～1917）は明治から大正にかけての歴史家・ジャーナリストで、江戸に生まれたが静岡に移り住み渋江の教えを受けている。その後上京し、信濃毎日新聞主筆となっている。また『独立評論』を創刊する等数多くの業績を残している。山路愛山の主宰した『独立評論』に渋江は惜しめない協力をして

いるが、これは渋江と山路愛山の静岡での邂逅があったからと思われる。渋江は山路愛山の『独立評論』に「渋江保氏談話」として幕末から明治にかけての日本社会の動向を執筆していて、当時の社会情勢を知る上で貴重な資料となっている。また、この他に訳読会を開いている。このことがみすず書房『独立評論7付録』に次のように記されている。「二 大正二年七月号訳読会予告 渋江保先生と本社山路愛山とは訳読会なるものを開き、政治、経済、文学、宗教に関する新古の英書を会読、輪講若しくは大意談話等の方法に依りて研究する同志を集めんとす。渋江先生は英書訳解に於ては所謂千軍万馬の間を往来したる老武士とも謂つべき碩学にして愛山等は年少時代に於て嘗てスペンサーの教育論、ミルの自由論等を先生に学びたり。先生の訳読会を設けんとする趣旨は左の如し。」(24)ここに「愛山等は年少時代に於て嘗てスペンサーの教育論、ミルの自由論等を先生に学びたり。」とあるように、静岡時代に山路愛山が渋江の教えを受けたことが記されている。みすず書房『独立評論7付録』から訳読会の広告が幾度となく『独立評論』に掲載されていることがわかる。

(2) 上田 敏

上田敏(1874～1916)は東京生まれの英文学者・詩人で海外文学の紹介に努め、訳詩集『海潮音』を刊行し日本の近代詩に大きな影響を与えた。上田敏は静岡文武館で渋江に教えを受けたと言われているが、渋江と上田敏との関係を物語る資料は今のところ見つかっていない。

(3) 松本亀治郎

松本亀次郎(1866～1945)は静岡県掛川市出身で、中国人留学生教育の父と呼ばれ、魯迅や周恩来、郭沫若、秋瑾等中国人留学生に日本語を教えた。平野日出雄の『松本亀治郎伝』に亀治郎の履歴が次のように記述されている。

「一 明治二十一年四月四日、静岡高等小学校訓導ニ任セラル。

一 二十一年五月ヨリ公務ノ余暇静岡県尋常師範学校教諭菅沼岩蔵及静岡安西南裏町渋江塾主渋江保等ニ就キ英学ヲ修メ、二十二年十二月迄スイントン万国史、クライブ及ヘスチング傳、ホーセツト小經濟書、スペンサー教育学、ベイン心理学等ヲ講習ス。」(25) この履歴から、松本亀治郎が渋江塾で渋江保から英語の手ほどきを受けていたことがわかる。菅沼岩蔵(1866～1944)は現静岡県湖西市出身で、静岡県はもとより、県内外の学校を歴任している。また、『あけぼの英語入門』や『あけぼの英語カード』、『初等英文典』等英語関係の著作を始め数多くの著書がある。菅沼岩蔵は、渋江が宝飯中学校長時代に隠居所としていた長泉寺で寄寓していたこともある。

渋江と亀治郎の師弟関係が親密な様子を伺うことが出来る一枚の葉書がある。葉書は静岡県掛川市立図書館大東図書館に今でも現存している。実際に渋江執筆の亀治郎宛の葉書を見る機会に恵まれた。『松本亀治郎伝』には、渋江の松本亀治郎宛の葉書について次のように記されている。

「渋江保は明治二十三年に静岡を去ったが、彼は静岡の初期英学と民権思想に大きな足跡を残した。渋江保は、二十二年の四月、亀治郎が東京高等師範学校入学のために上京したとき、送別会が開けなかった詫びをかねたハガキを出している。

(ハガキ文面)

花墨拝誦、益々御清福御勉強之趣奉大賀候。御出発ノ折、実ハ送別会ノ下組ミアリシナレド、何ヲ申ニモ急速ノ事ニテ間ニ合ヒ兼テ生憎ニ打捨申候。夏期ニハ可致拝盾事ト奉存候。菅沼モ上京ニ付定メテ御面会ノ事ト奉存候。先ハ無酬迄、余ハ又可致候 四月三十日

(ハガキ表書)

東京高等師範学校 松本亀治郎様

静岡安西南裏 渋江

保」(26)

松本亀治郎も渋江保もその後東京に在住していたので書簡のやりとりがあったと思われるがそれを裏付ける資料は今のところ見つかっていない。

松本亀治郎の教え子に文豪魯迅がいる。魯迅(1881~1936)と松本亀治郎そして渋江保を結びつける『支那人気質』という書物がある。『支那人気質』は、アメリカ人宣教師、アーサー・スミスの著した『Chinese Characteristics』の日本語訳本である。原書は、アメリカ・ニューヨークの出版社、Fleming H. Revelle Companyから1894年(明治27年)に出版され、当時アメリカでも人気を博し版を重ねている。『支那人気質』は、『Chinese Characteristics』の出版から二年後の1896年(明治29年)に、渋江保の翻訳により東京博文館から『支那人気質』と題して出版され初めて日本に紹介された。李冬木は著書『魯迅の研究』の中で、渋江保が翻訳した『支那人気質』が魯迅及びその著書に与えた影響について詳述している。

魯迅は1902年(明治35年)、国費留学生として日本に留学し、7年後の1909年(明治42年)に帰国している。松本亀治郎は1903年(明治36年)5月から1908年(明治41年)3月まで私立東京宏文学院で中国人留学生に日本語を教えることになるが、勤め始めた1903年(明治36年)に宏文学院で魯迅と出会っている。渋江は当時博文館から離れ大学館で冒険小説や怪奇小説を翻訳出版し始めた頃である。渋江と魯迅との直接的な接点はないが、松本亀治郎を介して渋江保についての紹介があった可能性はある。李冬木は『魯迅の研究』の11頁・12頁で『周作人日記』を取り上げ、周作人が読んだ相当数に上る日本書の中に博文館から出版された万国戦史、第10編『波蘭衰亡戦史』(中国語名『波兰衰亡战史』)が見られることを示唆している。(27)『周作

人日記』によれば、『波兰衰亡战史』は、魯迅が日本留学出発間際に周作人に送ったものであることがわかる。李冬木はこれを踏まえ、魯迅が日本留学前に既に渋江保のことを知っており、渋江の『波兰衰亡战史』に触れていたことを指摘している。

五 明治中期の静岡の英語教育と正則・変則英語教育法

平成14年に文部科学省が出した『「英語が使える日本人」の育成のための戦略構想の策定について』の趣旨によれば、「経済・社会等のグローバル化が進展する中、子ども達が21世紀を生き抜くためには、国際的共通語となっている「英語」のコミュニケーション能力を身に付けることが必要であり、このことは、子ども達の将来のためにも、我が国の一層の発展のためにも非常に重要な課題となっている。その一方、現状では、日本人の多くが、英語力が十分でないために、外国人との交流において制限を受けたり、適切な評価が得られないといった事態も生じている。同時に、しっかりした国語力に基づき、自らの意見を表現する能力も十分とは言えない。このため、日本人に対する英語教育を抜本的に改善する目的で、具体的なアクションプランとして「『英語が使える日本人』の育成のための戦略構想」を作成することとした。」(28)とある。しかし、今なぜ「戦略構想」なのか。明治期において既に会話中心の正則の英語教育と文法中心の変則の英語教育は行われていた。伊村元道の『日本の英語教育200年』の「第4章唯一の国産教授法「訳読」教授法(1) 3-1「正則・変則」の別は教育課程の違いから」に「明治2年(1869)に新政府の開成所・開成学校で、「語学」を正則とし、「購読」を変則と名づけたのが、正則・変則の名称の起源といわれる。それはあくまで制度上の違いで、明治3年の大学南校規則第7条には、「諸生徒を正則・変則の2類に分ち、正則生は外国人教師に従い韻学「発音」会話より始め、変則生

は訓読解意を主とし、「日本人」教官の教授を受くべき事」とある。ここからやがて「正則英語」、「変則英語」という教授法の違いへと変化し、むしろそのほうが一般的になった。明治4年には大学南校は変則教授を廃止し、必ず外国人教師をあて、優等生を海外に留学させる制度を確立した。こうして大学南校は完全に「アメリカの学校」へと変貌を遂げたのである。」(29)とある。大田雄三の『英語と日本人』には、明治期の学生の英語の水準が如何に優れていたかを示す資料が掲載されている。

「第二章 英語名人の時代」には、当時の英語熱について次のように書かれている。「物事は、順を追ってじょじょに発展していくことが多いが、日本人の英語力ということに関してはどうもこれはあてはまらないようだ。もちろん、時代がたつにつれて英語を学ぶ人間の裾野はどんどん広がっていったのだが、頂点に立つ、その時代時代で最高の英語力を身につけた人達の比較においては、日本人の英語力のピークは、まだ辞書なども完備していない明治のごくはじめの頃にきたようだ。これは一見不思議なようだが、西洋文明に対する熱狂のあまり、自国の伝統の価値を極端に軽んじる風潮のあった明治初年においては、自国語や自国語を通しての文化を犠牲にしてまで、欧語を重視した教育が未来のエリートに対して行われたからである。そこに生まれたのが「英語名人世代」であった。」(30)とある。同書74頁の「英語名人世代」には、英語名人世代のグループの年齢について次のような記述がある。「一八六一から前に二、三年、後に四、五年くらいのびる合計10年ぐらいの期間に生まれて、高等教育を受ける機会に恵まれた人々が、実は近代日本で最も英語（または他の欧語）を深く身につけたグループであったと思われるのだ。彼らを本書では仮に、「英語名人世代」と名づけることにする。」(31)とある。大田雄三の「英語名人世代」に、渋江保の年齢を当てはめて見ると、1857年生の渋江は、「

英語名人世代」の一年前に生まれている。

『日本の英語教育200年』の「13小学校英語の歴史は古い 1 公立小学校での英語教育」に「平成14年（2002）度から「総合的な学習の時間」が設けられて、公立の小学校でも英語を教えることが可能になった。公立小学校で英語を教えるのは歴史始まって以来、とでも言わんばかりの騒ぎようであるが、それはとんでもない誤解である。英語といえば一部の附属学校や私立学校を除けば中学校から始めるものと思われてきたための誤解である。たとえ全国一律ではなくても、公立小学校でも明治以来戦後の6・3制の発足直前まで、60年以上にもわたって、英語が教えられてきたという事実とはかく忘れがちである。」(32)とある。実際に江利川春雄の「小学校における英語科教育の歴史 (5) 全体像の把握をめざして」の「2英語科の位置と特色 2-2英語科（外国語科）の加設状況と本稿の時期区分」に「加設科目」の道府県別英語加設率の変化（3年分の累計）が図2としてグラフ化されている。「加設科目」とは必修科目以外に土地の状況などにより付加することができる科目のことで、今で言う学校独自で設定できる「学校設定教科」のような科目であろう。同書によればここで言う3年分とは文部省年報に加設科目統計が初めて掲載された1900年（明治33年）、中間点1905年（大正4年）、1939年（昭和14年）の累計値である。正確な加設率は数字で示されていないが、富山と静岡の両県が大阪・東京・愛知・神奈川に次いで5～6番目に加設率が高いことが伺える。(33)こうした加設率の高い静岡県の状況を見るにつけ、渋江保らが静岡の英語教育に果たした役割は少なくないと考えられる。なお、『日本の英語教育200年』の「第4章唯一の国産教授法「訳読」教授法 (1) 3-4慶應義塾も変則」の中で、広島英語学校に学んだ大和田建樹が慶應義塾の英語教育について次のように述べている。「いわゆる正則・変則という言葉の起こりしもこの時にして、

官立の外国語学校などにて規則立ったる英語の教育を受くるものを正則と称え、慶應義塾のごときただ英字を知り英書を読むに止まりて、英語を話し英文を綴るを意とせざる教授法を変則と呼ぶは今も同じことなれど、この時の変則流の発音は実に抱腹に堪えざる事も甚しかりしなり。」(34)この文面だけははっきりしないが、慶應義塾で学んだ渋江の教育法は変則と思われる。どちらにしても、今から百年以上前の明治期の地方都市、静岡においても高等小学校より英語教育が施され、渋江が静岡の英語教育発展の一翼を担っていたことが伺える。

六 終わりに

渋江は1885年（明治18年）12月～1890年（明治23年）3月の四年有余の期間、現静岡県浜松市天竜区春野町と静岡市に在住し、英学研究所・静岡英語専門学校・高等英華学校・静岡文武館・渋江塾において英語学者・英語教育者として英語教育の普及と啓蒙を図り、山路愛山や上田敏、松本亀治郎等、歴史に名を残した著名人を育て上げたことが明らかになった。また、渋江が明治期静岡の英語教育の発展に寄与したことがわかった。渋江は欧米の書物を通して英語を教育する中で弟子達に欧米の民主的な思想を教え、前島豊太郎や前田五門らと交わりながら自由民権運動の啓蒙家として活躍した。その後渋江は静岡を離れ1890年（明治23年）から書肆、博文館での執筆活動に入る。今後は、静岡における自由民権運動の啓蒙家としての渋江に焦点を当て、渋江の翻訳スタイルに自由民権運動がどのような影響を及ぼしたのかを考察したい。また、松本亀治郎、魯迅、渋江の三者を繋ぐ資料の発掘にも努めたい。

注記

- (1)『英学研究所』（静岡大務新聞 1885年5月15日）

- (2) 山田萬作編集発行『嶽陽名士傳全』（暁鐘新報社印刷 1891年10月17日）129頁
- (3) 森下喜作『栗田輝永君小傳』（『領家尋常小学校沿革史八』閉込み1890年6月13日）
- (4) 森下喜作『栗田輝永君小傳』（『領家尋常小学校沿革史八』閉込み1890年6月13日）
- (5) 森下喜作『栗田輝永君小傳』（『領家尋常小学校沿革史八』閉込み1890年6月13日）
- (6) 森下喜作『栗田輝永君小傳』（静岡県士族間宮武印刷 1890年6月13日）
森下喜作『栗田輝永君小傳』（『領家尋常小学校沿革史八』閉込み1890年6月13日）
- (7) 山路愛山『独立評論』第四号の澁江保氏談話「新聞今昔譚」（独立評論社1914年4月1日）60頁
- (8) 森鷗外『渋江抽斎』（中公文庫 1988年11月10日）302頁
- (9) 森鷗外『渋江抽斎』（中公文庫 1988年11月10日）302頁
- (10) 森鷗外『渋江抽斎』（中公文庫 1988年11月10日）303頁
- (11) 静岡県編集『静岡県史資料編十七近現代二』（静岡県1990年3月20日）877・878頁
- (12) 山路愛山『独立評論』再興第八号の澁江保氏談話「中江兆民居士」（独立評論社1913年9月1日）40頁
- (13) 山路愛山『独立評論』再興第八号の澁江保氏談話「中江兆民居士」（独立評論社1913年9月1日）40・41頁
- (14) 静岡県立教育研修所編集『静岡県教育史通史篇上巻』（静岡県教育史刊行会1972年11月3日）662・663頁
- (15) 飯田宏『静岡県英学史』（講談社 1967年10月20日）34～38頁
- (16) 静岡県編集『静岡県史資料編十七近現代二』（静岡県 1990年3月20日）870・871頁
- (17) 飯田宏『静岡県英学史』（講談社 1967年10月20日）44頁

- (18) 静岡県編集『静岡県史資料編十七近現代二』（静岡県1990年3月20日）868・869頁
- (19) 飯田宏『静岡県英学史』（講談社 1967年10月20日）39・40頁
- (20) 森鷗外『渋江抽斎』（中公文庫 1988年11月10日）303頁
- (21) 静岡県編集『静岡県史資料編十七近現代二』（静岡県1990年3月20日）875・876頁
- (22) 渋江保編『英国文学史全』（博文館 1891年11月17日）目次1頁
- (23) 静岡県編集『静岡県史資料編十七近現代二』（静岡県1990年3月20日）875・876頁
- (24) みすず書房編集部『独立評論7付録』（みすず書房 1988年3月30日）2頁
- (25) 平野日出雄『松本亀治郎伝』（静岡教育出版社 1982年4月20日）134頁
- (26) 平野日出雄『松本亀治郎伝』（静岡教育出版社 1982年4月20日）142・143頁
- (27) 李冬木『魯迅の研究』（佛教大学通信教育部 2010年4月1日）11頁・12頁
- (28) 文部科学省『「英語が使える日本人」の育成のための戦略構想の策定について』（文部科学省 2002年7月12日）
- (29) 伊村元道『日本の英語教育200年』（大修館書店 2003年10月20日）57頁
- (30) 大田雄三『英語と日本人』（講談社学術文庫 1995年9月10日）71頁
- (31) 大田雄三『英語と日本人』（講談社学術文庫 1995年9月10日）74頁
- (32) 伊村元道『日本の英語教育200年』（大修館書店 2003年10月20日）233頁
- (33) 江利川春雄『小学校における英語科教育の歴史（5）』（日本英語教育史研究 1996年5月10日）132～135頁

- (34) 伊村元道『日本の英語教育200年』（大修館書店 2003年10月20日）60頁

参考文献

- (1) 稲田雅洋『境 創刊号』（佐々木啓之 1983年9月1日）
(2) 森鷗外『渋江抽斎』（中公文庫 1988年11月10日）
(3) 東京大学の鷗外文庫書入本画像データベース『抽斎歿後』
(4) 山路愛山『独立評論』第七号の澁江保氏談話「明治初年の学風」
（独立評社1913年8月1日）
(5) 山崎一穎『鷗外ゆかりの人々』（教文堂 2009年5月25日）